

教育・保育目標	あふれる笑顔、つながる心、たくましく育つわかば
重点目標	人とのつながりを大切にし、心も体もたくましさを備えた笑顔のあふれる子どもを育成する

項目	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
----	------	-------	------	------	-------	-----	---------

学力の向上	学びを大切に した 保育の実践	主体性を はぐくむ 遊び環境	・子どもの姿に応じて適宜、園庭環境についての見直しを全職員で行い、共通認識するとともに、子ども理解を深める。 ・学年や棟で週に1回以上話し合いをし、子どもが自ら遊び、遊び込むことができる環境作りを行う。 ・月1回以上の乳児・幼児会議や、各リーダー会議において、保育内容の意見交換をする。 ・自園の実態に応じた教育課程の編成ができるよう、期ごとに1回教育課程の見直しを行う。	・保護者アンケートにおいて①「子どもは楽しく園生活を送っている。」②子ども園は、子どもの発達や興味関心に応じた保育を行い、子どもの意欲や主体性が育まれるように努めている。」と回答した割合がそれぞれ85％以上になる。 ・主体的に遊ぶ姿を保護者に月に2回以上、発信する。 ・子どもの育ちや学びを月に1回以上、複数クラスの職員で深くよみとり、主体性を大切にした保育展開が計画的に行える。 ・自園の実態に応じた教育課程を、各学年や全職員で編成や見直しをした上での教育保育を行える。	A	・保護者アンケートにおいて①②ともに肯定的な回答の割合がそれぞれ85％以上であった。 ・主体的に遊ぶ姿の発信は、幼児も乳児も月に2回以上行うことができた。 ・会議を定期的に設け、保育ウェブで子どもの姿を深く話し合い、保育の見直しや環境の再構成することができた。 ・教育課程に記している内容に沿い、保育ウェブをツールとし子どもの姿に応じた環境構成や変更を適時行っている。しかし、教育課程の即時的な見直しが出来ていないことが課題である。	・職員間での共通理解ができるよう、定期的な会議や研修を引き続き行い、語りあう場を作る。 ・子どもの実態に合っているか、毎学期に一度は教育課程を見直す機会をもつ。	・遊びの中で子どもが育ち、それが幼児教育であるということが保護者に理解してもらえるような工夫が必要である。 ・ホームページで発信を積極的に行えるといい。 ・保護者がコメントしたり反応したりできるものがあるといい。
		自然環境 の活用	・ビオトープ、園庭の木や草花に興味や関心がもてるような表示や写真を作成し、子どもが見やすい場所に配置する。 ・樹木や園芸植物、野菜の生育状況に応じて定期的に水やりや追肥を行う。 ・4月、7月、10月、1月に職員間で自然環境の活用について話し合う機会を作る。 ・ビオトープ内の生態調査を行い、生き物の発見や観察ができるよう定期的に手入れを行う。	・子どもが葉や花の色の美しさに心を動かし、季節によって変化する自然物を遊びに取り入れる中で植物のライフサイクルに気付く姿が見られる。 ・栽培物の生長過程に興味や関心をもって世話をする姿が見られ、収穫の喜びを味わう。 ・保護者アンケートにおいて「こども園は、子どもの豊かな感性を育むための自然環境を工夫して整えている。」と回答した割合が90％になる。 ・月に1回以上職員で自然環境の活用について話し合い環境の再構成を行う。また、定期的にビオトープの水質を点検したり藻を取ったり等、子どもから環境を整えようとしようとする。	A	・町の先生の話聞き、子どもが季節の虫やビオトープに生息する生き物の生態の話やビオトープの管理方法について知るきっかけになり、より興味や関心がもてた。 ・保護者アンケートにおいて、98％以上の肯定的な回答を得ることができた。 ・保育者が野菜や花等の栽培計画を年間通して行ったり、子どもの視点に合わせてプランターの配置を工夫したりすることで一層の興味に繋がった。季節ごとに栽培する野菜や自然物の季節の移り変わりの違いに気づき、興味・関心が増えた。 ・保育者間で園庭環境を整える際に掲示物を作り啓発したことで生き物に対しても興味や知るきっかけになった。	・季節の野菜を育てる際にその年の気候に合わせた栽培を踏襲したことで冬野菜が育たなくなることがあったので例年通りに目安にはしてもよいが時期などを細かく調整していく。	・栽培の工夫として南小学校区で農業が行われている所があるので、地域の力を借りるといいかもしれない。 ・南小学校のビオトープが完成したので交流してみてはどうか。
豊かな心・健やかな体	自分も人も大切にする子どもの育成	互いの よさを 認め合う 保育	・一人一人のよさや違いを認め合いながら子どもの気持ちや考え行動などを尊重した関わりを行うことで自尊感情を高めていく。 ・命の大切さを感じたり、自分が大切にされていると感じられたりするよう、一人一人に愛情深く関わっていく。 ・職員間で連携しながら異年齢、同年齢等の子どもが普段の遊びの中で自然と思いやりや親しみが持てるようにしていく。 ・日々の保育の中で保育者自身の道徳性の振り返りや話し合いを行うことで人権意識を高めていく。 ・人権に関するブロック研修、園内研修、保護者研修をそれぞれ年に1回以上行う。	・保護者アンケートにおいて①「こども園は、子どもに自分を大切にすることや、他のひとへの思いやりが育まれるよう教育・保育に取り組んでいる。」と回答した割合が90％以上になる。 ・保護者アンケートにおいて②「保育者は、子どもに愛情深く関わっている。」と回答した割合が90％以上になる。 ・異年齢、同年齢等の関わりの中で、互いに思いやりや親しみをもち遊ぶ姿が見られる。 ・子どもの人権の視点で保育についてクラスや学年、職員会議などで話し合いを行う。 ・講師を招聘する研修を年に1回以上行うと共にその内容を協議し人権意識を高めていく。	A	・保護者アンケート①②両方において90％以上と肯定的な回答を得られた。 ・意図した関わりの機会は設けてはいなかったが、園庭遊びなど乳幼児と一緒にあった時に、している遊びに誘ったり、相手の様子をみて使っている玩具を貸したり年下の子を思いやっていた。その場面を目にした時に、保育者が認める言葉掛けをしていることで子ども自身も嬉しさや自尊感情が高まり、自然に他者を思いやる気持ちが育ってきている。しかし園庭以外での異年齢児との関わりの機会が少なかった。 ・月一回以上、日々の保育の中で子どもの人権に関する話し合いを重ね、全職員に共有したことで職員自身の人権意識が変わり保育の中でも活かされている。 ・講演会に参加していない職員にも別の機会の人権研修の機会を設けて人権意識を高めることができた。	・乳幼児クラス間を超えて、他クラスへ遊びに行きたい子に対して、制限することなく、送り出せるように職員間での所在把握等連携を図る。	・異年齢の子ども同士の関わりの中で、どのような育ちがあるのかを動画を通じて紹介を聞いた。人とのつながりの大切さを伝える保育の充実に期待している。 ・人権と互いのよさを認め合う保育がどのようにつながっているかが分かりにくい。人権の研修を受けた結果等をどのように子どもに返しているかを発信していくといい。
		健康な心 と 体を育む	・食えることや食材に興味をもてるよう、栽培活動や旬の食材に関する掲示と給食のメニュー掲示をしたり、年齢に応じた食体験を実施したりする。 ・自らの健康や心身に関心をもち、生活習慣を意識できるよう視覚教材等の環境を作る。 ・「ほけんの話」などの保健指導を季節や発達段階に応じて適時行う。 ・子どもが自ら体を動かして遊びたくなるよう、室内外の環境や教材・遊具を工夫しながら活用する。	・保護者アンケートにおいて、「子どもは、こども園の給食を楽しみにしている。」と回答した割合が80％以上になる。 ・保護者アンケートにおいて、「保育者は、子どもの基本的な生活習慣が身に付くように、個々に応じて関わっている。」「子どもは、こども園での遊びを通して体を動かして遊ぶことが好きになったと感じる。」と回答した割合がそれぞれ90％以上になる。 ・保健、栽培、給食など、各担当職員で連携を図り、健康や食育に関する教材作成や指導を行う。 ・発達段階に応じた体を動かす遊びを職員間で協議し、室内外に構成をする。	B	・保護者アンケートにおいて、「給食を楽しみにしている」という項目では80％以上、「基本的な生活習慣が身に付くように個々に応じて関わっている」「体を動かして遊ぶことが好きになった」の項目では90％以上の回答を得ることができた。 ・保健や給食に関しては、各担当で連携を図り指導や教材作成を行うことができたが、栽培に関しては昨今の気候変動に対応することが難しく、また、冬野菜は特に植える時期の難しさから、十分に栽培し、保育に活かすことができなかったと感じる。 ・栽培担当で話し合う時間が取りづらく、各学年での活動となったため、学年間での連携を十分にとることができなかった。 ・毎月の職員会議で、子どもの楽しんでいる姿の写真を持ち寄り共有することで、体を動かす遊びについて園庭環境や室内での遊び方を考えることができた。	・栽培の年間の計画を立てて共有することで、担当から各学年に会議などで声をかけていく。 ・年間通して育てたいものを各学年で決めてもらい、苗の購入などをスムーズに行うことができるようにする。	・豊かな心と体をはぐくむのは栽培だけではない。 ・食事は人が生きていく上で最も基本となることだと考えているため、園で提供している食事がどのような形で子どもの口に入るのかを考えることも重要であると感じる。

開かれ信頼される学校園	安心・安全な園づくり	危機管理の徹底	・室内外 2 通りに分けたリスクマップにならい、どんな時に怪我が多いかを職員が把握する。 ・各種マニュアルについて各リーダーが中心となり適時講習会を実施する。 ・適した行動ができていたかどうか各自が反省と検証をする。	・園で起きたリスクに対してすぐに検証し、再発防止に努める。 ・アレルギー児・与薬対応や避難訓練等の各種マニュアルについて危機意識をもって全職員が対応できるようにしていく。 ・実際の災害を想定した各避難訓練を行い、職員が各自で判断し臨機応変に行動する。 ・保護者アンケートにおいて、「こども園は、災害等の発生に備えた避難訓練や施設・遊具等の安全点検を定期的の実施し、子どもの安全に関して適切な対応を図っている。」と回答した割合が95%以上になる。	A	・園で起きたリスクに対してすぐに検証し再発防止策を全職員に周知した。 ・よりリスクが少なくなるようにマニュアルを見直し作り替え、全職員が対応できるように職員会や伝達ノート等で周知した。しかし、見落としや失念により適当な対応ができなかった事案もあった。 ・毎月の避難訓練では、実際の災害を想定するとともに細かい役割分担を決めずに実施したことで、各々が臨機応変に実際の避難を想定した判断を行い、安全確認や子どもの誘導を行った。また、子どもに対しても動画を含めた視覚教材を準備し、子ども自身が災害を想像できるよう保育を工夫した。一方で、災害状況が細かく想定されておらず、実際の被害状況を想定した避難訓練が必要である。 ・保護者アンケートにおいて、「こども園は、災害等の発生に備えた避難訓練や施設・遊具等の安全点検を定期的の実施し、子どもの安全に関して適切な対応を図っている。」と肯定的に回答した割合が95%以上であった。	・マニュアルや対応策を変更した際は、定着するまでは常時職員室掲示板に掲示するなど常に目に入るようにする。また、職員間も意識し確認し合って声を掛け合う。 ・避難訓練の担当者が実際の被害状況を視覚的にわかるように想定した計画を立て、様々な状況に合わせて判断できるような訓練を実施する。	・開かれた園であることを望むが、開かれた園はリスクと隣合わせである。防災も大切だが、防犯に関する対応や対策も知りたい。
		園情報の発信	・静止画など様々な方法で保護者へ教育保育の可視化を行う。 ・HPを用いて地域へ園の情報を発信する。 ・新しいシステムがどの職員も扱えるよう、使い方の周知を行う。	・週1回程度 icuco やHPを用いて保護者や地域に園の取り組みを発信する。 ・園の玄関にHPのQRコードを貼りだし、誰でもアクセスできるようにする。 ・保護者アンケートにおいて①「こども園は、こども園の情報を園だよりや icuco、写真掲示、ホームページ等を通じてわかりやすく保護者に伝えている。」②「わかばこども園ガイドで知らせている教育・保育目標は適切である。」と回答した割合が90%以上になる。 ・ icuco の使用方法のマニュアルを作成し、どの職員も適切に使用できるようにする。	A	・週1回程度 icuco やHPを用いて保護者や地域に園の取り組みを発信している。 ・園の玄関にHPのQRコードを貼りだし、誰でもアクセスできるようにした。 ・保護者アンケートにおいて①は97.8%、②は90.6%の結果を得た。 ・ icuco の使用方法をマニュアル化し、どの職員も見て使えるように置いたり、職員会議で周知する機会を設けたりした。 ・園内研修の動画を撮影し、参加していない職員も見られるようにした。	・保護者が見たくなる icuco やHPの内容について考えていく。 ・GOPRO をより活用できるように検討が必要である。	・様々なツールで情報発信していることは表かできる。 ・情報発信する際は、個人情報との観点も大切にしないといけない。
	地域に根ざした園づくり 園運営の推進	子育ての支援事業	・保護者対象の保育参観、保育参加の日を2か月に1回以上設ける。 ・学級懇談会を学期に1回、個人懇談を年2回実施する。 ・登降園時等、保護者を対象に普段の保育の様子を伝える機会を適宜設ける。 ・IT媒体を活用し、HPやこどもだよりを定期的に発信し、子どもの育ちや学びをこまめに共有できる機会を設ける。 ・地域の子育て環境を対象に施設見学、育児相談を適宜実施する。	・保育参観・学級懇談会に7割以上の保護者が参加する。 ・参観や懇談時に参観のねらいや内容等を保護者に話す機会を設け、子どもの育ちや学びを共有する。 ・保護者アンケートにおいて「こども園は、『子どもが心身ともに健やかに成長してほしい』という保護者の願いに応えている。」と回答した割合が85%以上になる。 ・施設見学者に対し、定期的に見学会を開催・実施する。	B	・幼児の保育参観、学級懇談会における保護者の参加率は、一部5割を下回ることもあったが概ね7割以上であった。 ・幼児は、学級懇談会を学期に1回、個人懇談を計画通り年間2回実施した。保育参観では、どんな視点で遊びを見てほしいかを事前に保護者に伝えることで子どもの育ちや学びを理解してもらいやすくなった。懇談会では、保護者同士の声を聞き合うことで互いに成長の様子を共有することも出来た。しかし、懇談会の参加率は参観よりも下回るため子どもの育ちや学びを適宜伝える機会をもつ必要があると考える。また、週に1回の頻度で icuco にて「こどもだより」をクラスや学年単位で発行し遊びや生活の様子を伝えた。 ・乳児は懇談会を年に1回、保育参観懇談会が1回実施、保育参観1回、希望者のみ個人懇談を年に2回実施した。日々の姿を icuco にて配信しているため、個人懇談の希望者は少なかった。春の保育参観懇談では、園生活の姿や遊びへの興味が広がってきたことを伝えたのち、午睡後の姿を見てもらうことで普段の園生活を知る機会となり喜ばれていた。秋の参観にて、子どもと園で遊ぶことにより、園で遊んでいる様子が分かりやすくまた、保護者同士も声を聞き合うことで成長の様子を共有できた。 ・保護者アンケートにおいて、よくあてはまる、ややあてはまると回答した割合が合わせて90%以上であった。 ・施設見学希望者に対し、定期的に見学会を開催していることで、本園を知ってもらうことができた。	・引き続き保護者啓発などに努める。 ・参観や懇談に限らず、登降園等の場合やIT媒体、掲示物等で子どもの育ちや学びを共有できる機会をこまめに設ける。	・在園児の保護者向け子育て支援は充実していると感じる。在園児以外の地域の子どもの子育て支援の弊害にならないよう希望する。
		にじいろ保育拠点園の推進	・にじいろ広場を年齢別に開催し、小集団で体を動かす遊び等を通して一人一人の発達への支援を図る。 ・にじいろ保育の拠点園として、インクルーシブ教育・保育について、ブロック内の各園所へ情報発信を行う。 ・インクルーシブ教育について職員研修を行い、専門性を磨き、また保護者研修会を通して、推進と情報発信をする。	・にじいろ広場開催に向けて、担当者同士で月1回程度、事前に参加園の子どもの実態等を丁寧に話し、開催日には次回についての話し合いを行い、子どもの発達に即した内容を取り入れる。 ・拠点園として、遊具や書籍の貸出リストを作成し、ブロック内の園に大型遊具、教材、書籍の貸出をする。また、にじいろ広場や研修について広く周知できるように、年4回以上『にじいろだより』を活用し、情報発信をする。 ・月に2回程度、園内研修を実施し、様々な保育者が参加することで、専門性を磨き資質向上につながるようにする。また、保護者のインクルーシブ教育・保育への理解を深めるために、年に2回、保護者研修会を計画し実施する。	B	・事前の打ち合わせ代表会を設けて子どもの姿や実態等を共有し合い、子どもの発達に応じた遊びを準備しにじいろ広場を行った。また、広場終了後には事後の反省会を設け、その日の良かったところや改善点等を話し合い、より子どもの発達に即した広場となるように努めた。 ・遊具や書籍の貸し出しについては、ブロック内の全園に知らせているが、貸し出しリストについては広場に参加している園のみであった。 ・月に1～2回程度にじいろ園内会議を実施した。定期的に園内会議を行うことで、他クラスの子どもの実態把握ができ、個々の特性に合った関わりを学んで子ども理解につながった。保護者研修会では、身近な施設の講師を招き開催することで、インクルーシブ教育・保育への理解が深まった。また講師を招いた職員研修会を実施し、それぞれの保育を振り返るきっかけとなった。	・遊具や書籍の貸し出しリストを各園に送付することで貸し出しの促進に繋げる。	・Aブロック各園のにじいろ保育への取り組み方について情報の集約・共有化をすることで、全体の底上げにつなげると良い。

学校関係者評価総括

・少子化であり、一人っ子が多く、人間関係が家庭の中で育みにくいので、こども園で育てていくべきだと感じる。0～5歳児クラスで異年齢の関わりが良いので、もっと発信すると良い。

次年度に向けた重点的な改善点

・こども園における子育て支援のあり方、
・こども園の教育・保育の可視化や発信について

自己評価の基準

A：目標を上回った B：目標どおりに達成できた C：目標をやや下回った D：目標を大きく下回った